

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

翻訳訳語辞典を公開しています
文章に携わる人のための辞書・検索サイト
DictJuggler.net (<http://www.dictjuggler.net/>)

目次

■ 古典翻訳の現状

山岡洋一

一 読みやすく分かりやすい古典翻訳という愚

翻訳でどれほど工夫しても、読みやすさや分かりやすさで勝負するのであれば、古典に勝ち目はない。勝ち目がなくて競い合うことはない。古典には、昨日今日書かれた本にはない良さがあるのだ。勝負するなら、いちばん強みがある部分で勝負したい。「読みやすく分かりやすい古典翻訳」などというのは、愚の骨頂ではないだろうか。

■ 翻訳講義 (3)

山岡洋一

一 構文解析

原文を読んですぐに意味が分かるのであれば、文法知識の必要はない。しかし、読んですぐに意味が分かるのであれば、じつのところ、翻訳の必要はない。原文を読んでも簡単には意味が分からないから翻訳が必要になる。一読しただけではなかなか理解できない外国語の文章を読み解こうとするとき、最大の武器になるのが文法だ。だから、翻訳にあたっては文法が不可欠である。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

(@は半角文字に変えてください)

定期講読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

読みやすく分かりやすい古典翻訳という愚

まともな翻訳で古典を読みたいと思ったのは、もう数十年も前のことだ。偶然が重なって翻訳を職業にするようになると、自分で古典を訳したいと思うようになった。古典の翻訳について積極的に話し、書くようになったのはもう 10 年以上も前のことだが、当初は夢物語にすぎないというのが一般的な反応だった。実現の可能性などないと考える理由はよく理解できたので、とくに落胆もしなかった。否定的な反応ばかりでも意気消沈しなかったのは、ひとつの思い込みがあったからだ。ひとりが考えることは、少なくとも何百人か何千人かが考えているに違いないという思い込みだ。そして、その何百人か何千人かのなかから、あらゆる常識に逆らっても実行しようという人がでてくれば、賛同してくれる人が 1% ぐらいはいるだろうという思い込みである。

1% というといかにも少ないと思えるかもしれない。だが、出版の世界では、これはきわめて大きな数だ。出版翻訳は国際性がまったくなく、国内の読者だけを対象にしているのだが、それでも潜在的な市場規模は 1 億 3000 万人に近い。その 1% なら 130 万人弱だ、1% が賛同してくれて、その全員が本を買ってくれば、1 年に 1 点あるかどうかというほどの大ヒットになる。実際に買ってもらえるのは 1% のうちのさらに 1% にすぎないとしても、実売部数が 1 万部を超える。文句のつけようのないヒットだ。出版という世界は 0.01% の人に買ってもらえれば成り立つほど、小さな事業を行っているのである。

10 年以上前、そんなことを考えていたときと比較すると、いまは状況が様変わりしている。21 世紀になって、古典翻訳に取り組む出版社が急激に増えている。いまや、古典翻訳は注目を集める分野だと思えるほどになっている。

だがそのなかで、気になる傾向もあらわれている。いちばん気になるのは、古典翻訳で「読みやすく分かりやすい翻訳」が合い言葉になっているように思えることだ。古典というとこれまで、解読不可能と思えるような悪訳が多かったことを考えれば、「読みやすく分かりやすい翻訳」を求める読者が少ないのは理解できないわけではないが、そもそも古

典とは、読みやすくも分かりやすくもないものなのではないだろうか。

古典が難しいのは、著者が全身全霊を傾けて書いた本だからだ。読者におもねらず、受けを狙わず、誰が何といおうと、これだけは書いておきたいと思って書いた本だからだ。だからこそ、何世代にもわたって、ときには何十世代にもわたって読み継がれてきた。だから、古典は鯛（するめ）のようだと思う。簡単には歯が立たない。顎の筋肉が疲れ、歯が悲鳴をあげるほど噛みつぶしてようやく、味がでてくる。それが嫌なら、鯛を選ぶことはない。冷や奴あたりを肴にすればいい。

読みやすく分かりやすい本がお望みなら、古典などを選ぶことはない。タレントまがいの「著者」がしゃべりちらした内容に、何十回目かの使い回しを付け足して、どこかのライターが読みやすく分かりやすく書いた本、そういう本がいくらでもある。読者は馬鹿だし、頭を使うのを嫌うから、この程度のことを書いておけば十分だと考えて作られた本がいくらでもある。そんな本が「渾身の力作」という宣伝文句で売られていたりするのだから、読者はよほど見くびられているというべきだろう。意地も矜持もなく、自負心や自尊心なんぞ、かけらもないと思われているのだろう。

馬鹿な読者には馬鹿な本を買わせるにかぎるといわんばかりの新刊書に飽き飽きしたのなら、古典を読むのもひとつの方法だ。いま、古典が小さなブームになっているのは、そういう背景があるからだろう。世の中はうまくできている。ひとつの流れが極端になれば、逆の性格をもった流れがあらわれる。この新たな流れは主流に対する傍流なのだから、当初は小さくていい。主流との性格の違いがはっきりしていれば、小さくてもたしかにニッチ市場を確保できるだろう。そして、当初は隙間を狙う小さな動きでしかなかったものが、やがて主流になる例だって、世の中にはいくらでもあるのだ。

カギは性格の違いをはっきりさせることにある。出版業界でいまの主流な何かというと、まさに「読

みやすく分かりやすい本」ではないか。古典はこの主流でできた隙間を埋めるニッチ分野だ。だとしたら、いまの主流におもねることはない。「読みやすく分かりやすい古典」というのはまさに主流におもねる見方だ。これではうまくいかない。うまくいくはずがない。古典は読みやすくも分かりやすくもない、難しいからこそ味があり、読みがいがあると真っ正面から主張するべきなのだと思う。これが事実なのだから、事実をしっかりと読者に伝えるべきだ。

まともな翻訳で古典を読みたいというのが出発点ではないのか、昔の読みにくい翻訳でいいのかという質問がでてくるだろうか。では説明しよう。

1冊の本を訳すのは、山を歩くのに似ている。とんでもなくきびしい山もあれば、峠道を歩く程度のこともある。はじめての分野の難しい本であれば、道なき道に行くことになるし、やさしく書かれた本で、同じ著者の本を何度か訳していたのであれば、よく整備された峠道を鼻歌まじりで散歩するような場合もあるだろう。難易度はさまざまだが、翻訳の上り坂はふつうの山と違って、はじめがけわしい。富士山の胸突き八丁のような難所がはじめにある。とくに難しい場合には、ロック・クライミングのように一歩ずつ、足下を確かめながら進んでいくしかない。よく知っているはずの語でも、何度も辞書を引いて訳語を考える。手に入るかぎりの資料を時間が許すかぎり読んで、ヒントを探す。そうやって、おそろおそろ進んでいく。いつになったらこの本の翻訳が終わるのだろうかと不安になる。この難所をすぎると傾斜が緩やかになる。翻訳のペースが少しずつ上がってくる。やがて平坦になり、下り坂になる。ときには、辞書も資料も不要に思えて、超特急で下り坂を駆け抜けられるようになることもある。そのとき、翻訳者は訳者ではなくなる。著者になりきっている。原著者が乗り移ってきたというべきか、原著者に乗り移ったというべきかは分からないが、原著者が読者に伝えようとしたことがすべて理解できるように思えて、適切な言葉が苦勞なく浮かんでくるようになる。

翻訳者個人の道のりもこれに似ている。誰でも、はじめて翻訳に取り組んだときは、ロック・クライミングのように、こわごわだったはずである。やがて、翻訳が少しずつ楽になり、ペースもあがるようになったのではないだろうか。いつも下り坂を下るように、楽に翻訳ができるようになるのかどうかはまだ分からない。個人の場合には、記憶力の衰え

や体力の衰えといった別の問題がからんでくるからだが、知っているかぎりでは、翻訳者の盛りは普通の職業では引退の時期になってからである。

個体発生が系統発生を繰り返すように、翻訳者が経験する変化は、日本の翻訳の歴史にもあるのではないだろうか。ロック・クライミングのようであった時代があり、苦しい上り坂だった時代があり、平坦な道に近くなった時代があるのだと思える。いまの時代の翻訳者は、幕末維新の時代から150年ほどにわたって、先人が苦勞して切り開いてきた道を歩いているのだから、以前とは時代が違うのは確かだ。

ところが古典の翻訳ではとくに、ロック・クライミングのようであった時代に確立されたスタイルが色濃く残っている。原文の語や句にそれぞれ決まった訳語をあてはめ、一対一対応で訳していく方法、原文の構文のそれぞれを決まった訳し方で訳していく方法がとられている。いわゆる翻訳調だ。まずはこの翻訳調から脱却して、普通の日本語で訳す時期がきているのではないだろうか。

翻訳調になぜ問題があるのかという意見もあるだろうが、実際には無視できない問題がある。本来、楽しむために読む小説が楽しめなくなっているという問題もあるが、それ以上に大きな点として、翻訳調が論理を伝えるのに適していない可能性がある。

翻訳調は本来、原著を読む読者のための参考資料になるように訳すという性格をもっていた。だから、原文を読むためという観点でみれば、翻訳調の優れた訳文には一貫性がある。だが、原著を読むための参考資料として訳書を読む読者がほとんどいなくなった現在、訳文の質は日本語の文章として、単独で読むという観点で判断するしかない。この観点で判断したとき、翻訳調ではたして原文の論理を伝えられるのか、疑問だと思えるのである。英文和訳にみられるような翻訳調が、原文の情緒や感情を伝えるのに適していると考えた人はそう多くないと思うが、論理を伝えるには翻訳調がいいと考えている人は多いのではないだろうか。だが論理的なはずの翻訳調が支離滅裂ではないかと思えることも少なくない。

だから、昔ながらの翻訳調の翻訳はいまでは受け入れがたい。新しい翻訳が必要になっている。翻訳調の翻訳によって切り開かれてきた道をもっとうまく利用して、日本語で原著の論理を伝えるようにしなければならぬ。

要するに、いま、古典を訳し直すべきだと考えるのは、既存の訳が「読みにくく分かりにくい」からではないのだ。古典は難しい。だから、古典の翻訳にあたっては、原文の難しさをしっかりと伝えるようにしなければならない。これが当然のことだ。したがって、古典の翻訳を評価する際に、「読みやすく分かりやすい」かどうか基準になるはずがない。基準はまったく違う。少なくとも論理を扱う本では、原文の論理を日本語で伝えられているかどうかをもっとも重要な基準になるはずだ。日本語として読んだときに（つまり、原著を読むための参考資料としてではなく、訳書だけを読んだとき）、原文の論理がしっかりと理解できるようになっているかどうか、もっとも重要な基準になるはずだ。原文が読みにくければ、訳文も読みにくくなる。原文が分かりにくければ、訳文も分かりにくくなる。それでも、しっかりと読めばしっかりと理解できる、そういう訳文になっているかどうか、何よりも重要なはずだ。

具体的にどういふ翻訳にすべきなのかに関しては、技術的な問題をいくつも考える必要がある。また、論理を伝えるのに適した新しい文体が必要になっているとも思える。しかし、じつのところ、まずは翻訳にあたっての姿勢が重要なのではないかと思う。ロック・クライミングのように一歩ずつ、足下を確かめながら訳していくのではなく、著者になりきって訳していく姿勢である。原著者になりきって、原著者が読者に伝えようとしたことを素直に伝えようとする姿勢である。つまり、下り坂を下りていくときの姿勢である。

この姿勢で古典を訳すのがじつはきわめて危険であることも、心得ておかなければならない。訳者は原著者になりきっているとき、原著の一語一句を慎重に確認したりはしない。原文を読んで自然に頭に浮かんでくる文章をひたすら入力していく。こういう状態になれば、日本語としての質の高い訳文ができることが多いが、同時に、思い込みが激しくなる危険がある。語句の解釈を間違えたり、語句や文、ときには段落まで飛ばして訳したりもする。一種の陶酔状態になって訳しているのだ、荒い訳になる危険があるのだ。

翻訳者はある程度熟練してくれば、このような危険を十分に認識しているはずなので、翻訳が終わっ

た後に、慎重に見なおしをする。抜けや間違いを修正していく。だが、思い込みというのは恐ろしいもので、いくら慎重に見なおしても、翻訳者本人が気づく点にはかならず限度がある。誰でも、どんなことでも、自分の間違いにはなかなか気づかないものなのだ。

そこで重要になるのが編集者と校正者だ。第三者の冷静な目で、はじめての読者という立場で、訳文を慎重に検討すれば、抜けや間違いを指摘するのはそう難しくない。古典の翻訳ではとくにそうだ。古典というからには、定評のある既訳があるはずだからだ。そして、古典のように難しい本を訳すときには、優秀で熱心な編集者や校正者と組めるかどうか、翻訳者にとって決定的な意味をもっている。翻訳というのは個人技だと思えるかもしれないが、実際にはチームで取り組む仕事なのである。

じつは、「読みやすく分かりやすい翻訳」という見方がいちばん危険なのは、この段階だともいえる。編集者や校正者が読みやすさと分かりやすさにばかり気をとられていると、原文の段落が長すぎるからこらで切ろうとか、理解が難しい言葉や文章をやさしくしようとかにばかり関心を向けるようになる。翻訳の質を高めることにはそれほど注意しなくなる。これではうまくいかない。

21世紀にふさわしい古典翻訳、質の高い古典翻訳のためには、編集者、校正者、翻訳者の連携が重要だと思う。そして、古典の翻訳書がちょっとしたブームになっているといっても、潜在的な読者のうち、1%にも満たない数の読者を獲得できているにすぎないことを忘れてはならない。古典の分野で未曾有の大ヒットでも、0.1%から0.2%の読者に買ってもらえるにすぎない。古典翻訳はいまのところ、少数派のなかの少数派の支持に支えられているのだ。この支持がさらに強固になるように努力していけば、いつか、支持者が増えて、多数派になる可能性だってないわけではないのだ。それには古典の強みを強調するべきだ。翻訳でどれほど工夫しても、読みやすさや分かりやすさで勝負するのであれば、古典に勝ち目はない。勝ち目がないところで競い合うことはない。古典には、昨日今日書かれた本にはない良さがあるのだ。勝負するなら、いちばん強みがある部分で勝負したい。「読みやすく分かりやすい古典翻訳」などというのは、愚の骨頂ではないだろうか。

構文解析

前回に引き続き、フランクリン・ローズベルト大統領の第 1 期就任演説を素材に、翻訳について考えていきます。

まずは、皆さんの訳文から、違いが目立った点をいくつか取り上げます。最初に取り上げるのは、皆さんの訳し方がほぼ半分ずつに分かれていた部分です。第 1 段落の長い長い第 1 センテンスの一部です。まず原文をあげ、つぎに訳文をあげます。訳文は典拠型例ですから、何人かの訳を組み合わせて作っている場合もあります。

1. ... I will address them with a candor and a decision which the present situation of our people impels.
- 1.1 ……私が率直に、そして人々の現状が駆り立てる決意を持って大統領就任演説を行うこと…
- 1.2 ……国民の現在の事態において必要とされる率直さと決意をもって私が演説すること……

ここで問題になるのは、**a candor and a decision which ...**の部分、とくに **and** で何と何を並列しているかです。

つぎは第 2 段落の第 2 センテンスです。原文は第 1 センテンスからあげますが、訳で問題なのは第 2 センテンスです。今度は半分ずつではなく、2.1 が 8 割ぐらい、2.2 が 2 割ぐらいでしょうか。

2. In such a spirit on my part and on yours we face our common difficulties. They concern, thank God, only material things.
- 2.1 幸運なことに、共通の困難は物質的なことにのみ関連しているだけなのです。
- 2.2 さいわい、彼らが心配しているのは物質的なものだけだ。

ここでは 2 つの違いがあります。第 1 に、**they** が何を指しているのか、第 2 に、**concern** の意味です。

もうひとつ、第 3 段落の最初のセンテンスを取り上げます。ここでは皆さんの訳にかなりのばらつきがあります。代表的なものを 2 つだけあげます。

3. More important, a host of unemployed citizens face the grim problem of existence, and an equally

great number toil with little return.

- 3.1 さらに重大なことは、多数の失業者が生活の残酷な問題と、また膨大な低賃金労働と格闘している点です。
- 3.2 さらに重大な問題は大量の失業者たちが存続の危機に瀕していることと、同様に多くの国民が低賃金の重労働を強いられていることである。

ここで問題になるのは、1.と同じ **and** による並列の処理ですが、それ以外にもいくつかの問題が絡んでいます。

前回、翻訳には正解はないという話をしました。翻訳家 10 人が同じ原文を訳したとき、10 通りの訳ができ、どれもいうならば「正解」だということもある。なぜかという、翻訳とは原文の意味を理解した結果を母語で書く仕事であり、原文の理解の仕方、つまり原文の解釈が違えば、訳文が違ってくるのが当然だからです。原文の解釈が十人十色なら、訳文も十人十色になります。しかし、10 通りの訳がどれもいうならば「正解」だということもあるというのは、裏を返せば、何人かの訳はどこかが間違っている可能性もあるということです。別に驚くようなことではありません。翻訳家は当然ながら完璧を目指して努力していますが、たまには間違えることもあります。ですが、間違いが多い場合には問題です。翻訳という仕事は、言語を共通項とする共同体としての民族を代表して、他の民族から優れた知識や技術、考え方、感情、情報などを学び、学んだ内容を母語で伝える仕事です。ですから、翻訳を行う際には、間違いを極力減らす必要があります。そのために何をすべきかがこの講義の大きなテーマであり、そのひとつとして、今回は構文解析を取り上げます。

文法はなぜ必要か

翻訳の目的は、原文の意味を母語で伝えることです。したがって、原文を読んで意味がすぐに分かるのであれば、文法は不要です。この点は母語について考えてみればすぐに分かります。皆さんのほとんどは日本語が母語だと思うので、日本語で書かれた文章を読むときのことを考えてみましょう。難しい文章を読んで、意味がよく分からないというとき、日本語文法の本を開いてみようと思うのでしょうか。

そういうことはまずないはずですが、中学高校のときに国文法を学んだはずですが、たとえば五段活用だとか、サ行変格活用だとかの言葉は忘れても、読み書き聞き話すことに何の支障もないはずですが。だから文法の必要性など感じないのが当然です。

同じことは皆さんの大部分にとって外国語である英語にもいえると思えるはずですが。読んで意味が分かれば文法は不要ではないか、それに聞き話すときに文法のことなど考えている暇はないではないかと。たぶん、こういう考えから、いまでは英文法はすっかり人気なくなっています。中学高校でもそれほど教えていないし、大学でも英文法を専攻しないかぎり、授業もないといった状況になっているようです。

しかし、翻訳にあたっては文法の知識が不可欠です。構文をしっかりと理解できなければ、翻訳はできません（もうひとつ、英文を書くときにも文法知識

が不可欠です）。どうしてなのかと思われるかもしれませんが、理由は簡単です。読んですぐに意味が分かればたしかに構文解析の必要はないのですが、読んですぐに意味が分かるのであれば、じつのところ、翻訳の必要はないのです。これがいまの時代には翻訳の原則になっています。原則ですから、もちろん例外はあります。顧客に読んでいただくために翻訳が必要だったり、子供のために翻訳が必要だったり、さまざまな理由で読めばすぐに分かる文章が翻訳されています。しかし翻訳の本来の姿、原則はこうではない。読んだだけではなかなか理解できないほど難しいから、翻訳が必要になるのです。

一読しただけではなかなか理解できない外国語の文章を読み解こうとするとき、最大の武器になるのが文法です。この点は文法というものの歴史を考えても明らかです。日本で国文法が発達したのは江戸時代ですが、これは江戸時代になると、平安時代とそれ以前の古典がなかなか読めなくなっていたから

INAUGURAL ADDRESS OF FRANKLIN DELANO ROOSEVELT

Given in Washington, D.C.

March 4th, 1933

This is a day of national consecration, and I am certain that on this day my fellow Americans expect that on my induction into the Presidency I will address them with a candor and a decision which the present situation of our people impels. This is preeminently the time to speak the truth, the whole truth, frankly and boldly. Nor need we shrink from honestly facing conditions in our country today. This great Nation will endure as it has endured, will revive and will prosper. So, first of all, let me assert my firm belief that the only thing we have to fear is fear itself—nameless, unreasoning, unjustified terror which paralyzes needed efforts to convert retreat into advance. In every dark hour of our national life a leadership of frankness and of vigor has met with that understanding and support of the people themselves which is essential to victory. And I am convinced that you will again give that support to leadership in these critical days.

In such a spirit on my part and on yours we face our common difficulties. They concern, thank God, only material things. Values have shrunk to fantastic levels; taxes have risen; our ability to pay has fallen; government of all kinds is faced by serious curtailment of income; the means of exchange are frozen in the currents of trade; the withered leaves of industrial enterprise lie on every side; farmers find no markets for their produce; and the savings of many years in thousands of families are gone.

More important, a host of unemployed citizens face the grim problem of existence, and an equally great number toil with little return. Only a foolish optimist can deny the dark realities of the moment.

And yet our distress comes from no failure of substance. We are stricken by no plague of locusts. Compared with the perils which our forefathers conquered because they believed and were not afraid, we have still much to be thankful for. Nature still offers her bounty and human efforts have multiplied it. Plenty is at our doorstep, but a generous use of it languishes in the very sight of the supply. Primarily this is because the rulers of the exchange of mankind's goods have failed, through their own stubbornness and their own incompetence, have admitted their failure and have abdicated. Practices of the unscrupulous money changers stand indicted in the court of public opinion, rejected by the hearts and minds of men.

です。源氏物語すらなかなか読めず、それ以前の古事記や万葉集ではほとんど読めなくなっていた。そこで、発達したのが文法です。ヨーロッパでも、文法が発達したのは、ラテン語や古代ギリシャ語の古典を読むためでした。中世になると、これらは日常の言語ではなくなっていましたので、読めばすぐに分かるというわけにはいかななくなっていました。古代の言語で書かれた古典を読み解くために、文法が必要になったのです。

読めば意味が分かるのであれば、文法は不要です。読んでも意味がなかなか理解できないから、文法が必要になるのです。そこで、文法は、文章の形を手掛かりにして、意味を考えていきます。形から入るのが文法です。文章は目の前にあり、その形をみていけば意味が読み解けるのですから、文法というのは便利なものです。

例外が多い英文法

もっとも英文法の場合、以下で何度もその話がでてきますが、形だけでは判断がつかない点もいくつかあります。例外が多すぎるのです。

例をあげましょう。これは英語は苦手という大学生から聞いた話です。家庭教師で中学生を教えている、英語の品詞が分かっていないことに気づいたのだそうです。自分の経験では品詞を意識するようになって、英語がだいぶ読めるようになったので、中学生に品詞を教えることにしたそうです。英文和訳の問題の冒頭から、これは定冠詞だろう、つぎが名詞で、その次が動詞で、つぎが名詞で、という調子で教えていったのですが、すぐに品詞の分からない単語があって止まってしまったといいます。どんな単語で止まったかというと、to なのです。その後に動詞があったので、to 不定詞の to なのですが、動詞がつぎにあるのだから前置詞ではないし、副詞というのも奇妙だし、というわけです。

英文法ではどう考えているのでしょうか。結論をいえば、品詞という点では「定説はない」、いいかえれば、「よく分からない」ということです。

これが典型ですが、英文法のいわば基礎にある品詞という概念すら、どうも頼りなく感じられます。例外が多すぎて、法則といえるかどうか疑問のように思えるのです。たとえば、book という単語をみると、普通は名詞ですが、そのままの形で動詞にも形容詞にもなります。たぶん、英語で使用頻度の高い

語を 100 なり 1000 なり選び出して、それぞれの品詞を調べていくと、ひとつの品詞でしか使われない単語はむしろ例外なのではないでしょうか。たとえば the なら定冠詞だけだろうと思うと、副詞としても使われますし、he は代名詞だろうと思うと、名詞としても使われるのです。使用頻度が多い語、つまり文章のなかで大部分を占める語が、形が変わらないまま、品詞が変わるのですから、形を手掛かりに意味を考えていくという文法の基本が成り立ちにくくなっているといえます。

例外が多すぎる法則というのは一般には、法則としてどこかに欠陥があると考えべきです。いずれ、天動説に対する地動説のような斬新な理論があらわれ、例外を最小限にとどめて、英語という言語の法則性を見事に説明してくれるようになるのではないのでしょうか。

とはいえ、いまのところはそういう文法理論はまだ完成していないようなので、ごく普通の伝統文法で考えていくしかありません。伝統文法で教えらるる点はどれも、かなり例外が多く、十中八九はこうだ、つまり、10%から 20%は例外があるという話が多くなります。また、形を手掛かりに意味を考えていく文法にはありうべからざることでありますが、意味を考えて判断するしかない場合もたくさんあります。そういう意味で頼りない面も多々ありますが、それでも翻訳にあたっては、文法知識は不可欠です。

以下では、冒頭にあげた例を手がかりに、とくに間違えやすい文法事項を取り上げていきます。間違えやすい部分というには、じつは、簡単そうに見える部分です。文の構造が一読した程度ではまったく分からない部分では、誰でも必死に考えますし、翻訳を行うからにはいくつかの文法書を用意しているはずですから、意外に間違えないものです。簡単そうにみえて、あまり考えずに訳す結果、間違えてしまう例をいくつかみていきます。

並列の処理

前述の 1.と 3.に並列の処理の問題があります。まずは 1.について考えていきます。もう一度、1.をみてみましょう。

1. ... I will address them with a candor and a decision which the present situation of our people impels.
- 1.1 ……私が率直に、そして人々の現状が駆り立てる決意を持って大統領就任演説を行うこと…

1.2 ……国民の現在の事態において必要とされる率直さと決意をもって私が演説すること……

前述のように、ここで問題になるのは、a candor and a decision which ...の部分です。1.1 と 1.2 では並列の処理が違っていています。それぞれ、以下のように解釈しています。

1.1 a candor and (a decision which)

1.2 (a candor and a decision) which

この2つのうち、どちらが正しいのでしょうか。まずは、英語の並列処理の原則を確認しておきましょう。誰でも知っているはずの点ですが、以下が原則です。ちなみに以下をはじめとする文法事項では、柴田耕太郎著「翻訳講座 文法編」を参考にしています。未刊行の講義録を提供された柴田耕太郎氏に感謝します。

基本的な形

1, 2, 3, —, and N (米語)

1, 2, 3, — and N (英語)

基本的な形の例外

and の省略 — リズム重視、または列挙の未完了 (and は列挙の終了を意味する)

1 and 2 and 3 and — and N —各部分の強調

並列の原則

同一の品詞、同一の形、同一の機能、同一の時制のものを結ぶ (少なくともこれが英文の正しい書き方)

並列の例外

動名詞と to 不定詞、単語と句、単語と節、句と節などが並列されることもある (悪文)

翻訳にあたっては、原則にしたがって読み、意味上、矛盾がある場合に例外を考える

[例]

A and B of C

[原則] (A and B) of C

[例外] A and (B of C)

以上の点を 1. に適用するとどうなるのでしょうか。

1. は [例] に似ており、of ではなく、which になっています。

[原則] (a candor and a decision) which

[例外] a candor and (a decision which)

つまり、この部分は原則として、同一の形のもの、

a candor と a decision が並列され、両者を先行詞として which 以下がついているとみるべきです。これが正しく書かれた英文であれば、原則通りのはずです。前述のように、十中八九これが正しいのです。形からは、そう判断すべきです。ところが、この原則にしたがっていない悪文もあり、形から判断した結果では意味上、矛盾がある場合に、例外を採用します。この場合はどうでしょう。おそらく、原則通りに判断して、意味上の問題はないと思えるはずです。

前述のように、皆さんの訳文ではほぼ半分が例外を採用していました。意味を考えたうえで、例外を採用したのでしょうか。そういう人もいるでしょうが、原則と例外のうちどちらを採用するかを考えるのではなく、何も考えずに例外の方だと思い込んでしまうことが多かったのではないのでしょうか。そうであれば問題です。

何も考えずに例外を採用したとき、その結果、正しい答えになっていれば幸運ですが、間違っていた場合には (十中八九間違いなわけですが)、二重にみっともないということを覚えておくべきです。意味を取り間違えた点でみっともないだけでなく、and が「同一の品詞、同一の形、同一の機能、同一の時制のものを結ぶ」という原則を知らないかのように思われてしまうのですから。間違えるにしても、例外と判断すべきものを原則の側だと判断して間違ったのであれば、まだ救いがあります。ほとんど無意識のうちに例外を採用して間違えるのは最悪だと思っておくべきなのです。

代名詞の処理

つぎに 2. の代名詞の処理についてみていきましょう。もう一度 2. をみてください。

2. In such a spirit on my part and on yours we face our common difficulties. They concern, thank God, only material things.

2.1 幸運なことに、共通の困難は物質的なことのみ関連しているだけなのです。

2.2 さいわい、彼らが心配しているのは物質的なものだけだ。

1. の並列の処理では、例外を採用すべきだと主張する余地がないわけではありません。しかし 2. の代名詞の処理の場合には、2.2 は間違いだと断言できます。代名詞の処理にかぎり、2.1 が正解です (言葉の選択などでは、まだまだ工夫の余地があります)。

則

代名詞には解釈が難しい場合がたくさんありますが、普通はじつに単純です。代名詞は基本的に名詞の繰り返しを避けるために使われるもので、ひとつ前にでてきた名詞を受けるのが通常です。ですから、代名詞がでてきたら、その前に遡って行って、その代名詞に置き換えられる名詞を探せばいいのです。もちろん、**they** の場合なら、単数の名詞ではありません。複数形の名詞か複数の名詞のはずです。そうやって探して行って、最初に見つかった言葉を指していると考えれば、十中八九正しいのです。またしても十中八九で、例外が少なからずあります。たとえば意味上、最初の語では矛盾があり、いくつか前の語を指していることがありますし、前ではなく、後ろにある語や文を指す場合もあります。また、文法書を見ると、代名詞の特殊用法がいくつも指摘されています。それでも、これが原則であることはしっかりと確認しておくべきです。

この原則にしたがって原文をみていくと、この **they** の前にある複数の名詞は、まずは **difficulties** です。その前には **days** があり、複数扱いの **people** がありますが、この **people** を指すと考えるのは無理です。なぜかという、第 1 に意味上、これは過去の時代の国民だからですが、第 2 に、**they** を主語とするセンテンスの動詞が **concern** であり、受動態ではなく能動態だからです。受動態であれば人を主語にとり、2.2 の訳文にある「心配する」といった意味になりますが、能動態の場合はものやことを主語にとり、意味が違って来るからです。この点は英和大辞典など、大きな辞書で確認しておいてください。もうひとつ、**they** には世間一般の人を指す特殊な用法がありますが、この場合に特殊な用法だと解釈できないことは、動詞が **concern** であることから明らかです。

2.2 が典型ですが、代名詞の処理は意外に間違えやすいものです。なぜ間違えやすいかという、英語と日本語で代名詞、とくに人称代名詞の性格が大きく違うからです。以下をみてください。

代名詞が指すもの

日本語

太郎の話だが……彼¹……次郎……彼²……三郎……彼³……

「彼」はいずれも太郎を指すことが多い

英語

John he¹ Richard he² Bill he³

he¹はJohn、he²はRichard、he³はBillを指すのが原

このように、日本語と英語では代名詞の使い方が違うので、日本語の感覚で英文を読んでいると、間違えることが多いのです。

上の **they** の場合にはもうひとつ、人称代名詞という印象が強いという問題があります。人ではなく、ものやことを指す場合がかなりあるので、注意が必要でしょう。

語の繰り返しの避け方

もうひとつ、代名詞に関連して、日本語と英語にはかなり目立つ違いがあります。英語の代名詞は基本的に、同じ語の繰り返しを避けるための方法のひとつとして使われます。この点を確認しておく、英語の代名詞の性格が理解しやすくなりますし、その他にも、日本語の感覚で読んだときに死角になりやすい点がいくつかあることも理解できるはずです。

英語で同じ語の繰り返しを嫌うという点は、たぶん、英文ライティングを学んだ人なら、たたき込まれてきたはず。同じ語を繰り返し使うと、教養のない文章だとされるのです。日本語にはない感覚ですから、日本人が英文のライティングを学ぶときに、真っ先にこの点を指摘されるのが普通でしょう。

同じ語の繰り返しを避けるためにまず使われるのが、言い換えでしょう。英文ライティングの教師に、別の語に言い換えるよう求められ、そのためにシソーラスを使うように指示されたはず。シソーラスとは日本語でいえば類語辞典ですが、英語のシソーラスと類語辞典では、普及度がまるで違うようです。英語圏では、文章を書くときになくてはならない道具として、シソーラスが普及しています。

日本語ではどうでしょう。最近では優れた類語辞典がいくつか出版されていますし、とくに優れた類語辞典をインターネットで自由に検索できるようになっています。以前に紹介した翻訳訳語辞典が掲載されているサイト、DictJuggler.netに「類語玉手箱」があります。これは翻訳家の藤本直氏が 30 年の歳月をかけて作成したもので、翻訳にあたってきわめて便利な辞書です。言葉の選択に迷ったときに使ってみてください。

しかし日本語の類語辞典は、執筆を職業にしている人にはある程度知られているとしても、文章を書

くときに必須の道具だといえるほどにはなっていません。一家に一冊あるようなものではないのです。類語辞典がそれほど普及していない理由は簡単です。日本語では英語と違って、同じ語を繰り返し使うのを嫌わないし、同じことを別の言葉に言い換えると、無用の混乱を招きかねないとすら考えられています。

もっとも、日本語でも同じ言葉の繰り返しを嫌う場合があります。たとえば、「その日の午前中に急に大阪に行くことになった」と書くと、近頃のお節介なワープロ・ソフトでは、同じ助詞の繰り返しを避けるようにと注文をつけてくることがあります。また、「～することができることになった」というように「こと」を繰り返すのも、嫌われます。

文法では語を内容語と機能語に分類することがあります。普通の名詞や動詞など、何らかの意味を伝える語を内容語といい、助詞など、文法的な機能だけを示す語を機能語というのです。この分類を使うと、日本語では機能語の繰り返しを嫌う傾向があるのに対して、英語では内容語の繰り返しを嫌う傾向があるといえます。英語ではたとえば、of とか he とかの言葉は何度でも繰り返し使えますが、たとえば material といった言葉では、繰り返しを嫌って、何とか言い換えようとしてします。

英語で内容語の繰り返しを避けるために使われる方法が主に3つあります。第1に代名詞、代動詞などを使う方法、第2に別の内容語で言い替える方法、第3に省略する方法です。内容語の繰り返しを嫌うことをよく意識しておかないと、とくに第2の方法がとられたときに読み違えることになりかねません。また、翻訳の技法という観点では、英語の原文で内容語の繰り返しを避けた部分で、たとえば代名詞を使うか、別の語に言い替えた部分で、同じ内容語を使って訳すことができる点に注意しておくべきです。内容語の繰り返しを嫌わない日本語の性格をうまく活かすと、誤解されにくい文章を書くことができる場合が少なくないのです。

5 文型

以上を前提に、3.をみていきましょう。

3. More important, a host of unemployed citizens face the grim problem of existence, and an equally great number toil with little return.

3.1 さらに重大なことは、多数の失業者が生活の残酷な問題と、また膨大な低賃金労働と格闘している点です。

3.2 さらに重大な問題は、大勢の失業者たちが存続の危機に瀕していることと、同様に多くの国民が低賃金の重労働を強いられていることである。

ここで and が何と何を並列しているのかを考えていくと、一筋縄ではいかないことに気づくはずですが、訳例の 3.1 では、the grim problem of existence と an equally great number toil with little return とが並列されていると考えています。ですがこの場合、an equally 以下は名詞句でなければならず、number toil の部分のつながりが説明できなくなります。結局、3.2 のように、a host of unemployed citizens face the grim problem of existence と an equally 以下とが並列されているとみるのが適切だと思えます。

ですがその場合、an equally 以下は節になり、an equally great number が主部、toil が動詞だと解釈することになりますが、不定冠詞からはじまる単数形の主部に toil という動詞がつくのは奇妙ではないでしょうか。三単現の s がつくはずではないでしょうか。

そう考えてみていくと、and の前の節も、不定冠詞からはじまる主部に対して、動詞が face であり、三単現の s がついていないことに気づくはずですが、これはなぜなのでしょう。文法上の問題にはなかなか解決がつかないものもありますが、多くはなぜなのだろうと疑問をもったときに、問題の半分は解決しています。これは主語と述語動詞の一致の問題なのだろうと考えたとすれば、問題は大部分解決しています。ここで主部は a host of unemployed citizens ですが、その中心は citizens で、これを unemployed と、もうひとつ、many に似た a host of が形容しているのです。この場合、a host of は量ではなく、数を意味しているので、複数扱いになります。

この点が分かると、toil になっている理由も簡単に分かるはずですが、an equally great number は、a host of の言い替えに近く、この後ろにあるべき of citizens が繰り返しを避けて省略されているのです。つまり、and 以下は、an equally great number (of citizens)が S、toil が V の第1文型であり、with little return は V を修飾する副詞句で、この全体が a host of unemployed citizens face the grim problem of existence と並列されているのです。

このように構文を分析し、原文の文型を矛盾なく解釈できる結論を探し出せば、原文の読みを間違えることは少なくなるでしょう。

ですから翻訳にあたっては、主語、述語、目的語、補語といった点を確認する必要があります。もちろん、一読して意味が簡単に分かる場合には、こうした点はほとんど意識しません。というより、主語や述語などが無意識のうちに判断できる場合には、意味が分かるというべきかもしれません。しかし、どうも疑問があるとか不安があるとかの場合、センテンスの主語は何で述語は何で、目的語や補語がどうなっているかを確認することが重要になります。

学校英語ではこれを 5 文型という形で教えています。中学高校のときに学んだはずですが、SV、SVC、SVO、SVOO、SVOC という 5 文型です。

この 5 文型という見方のもとになったのが、C. T. Onions, *An Advanced English Syntax*, 1903 (C.T.アニオンズ著、安藤貞雄訳『高等英文法』文建書房、1969年)です。1903年という明治36年ですから、日本が英語教育法を積極的に取り入れていた時期にあたります。当時の最先端だった文法理論がいまでも学校英語で教えられているわけで、時代後れだとする意見もあります。5 文型にはいろいろと問題もあるので、時代後れだとするものももっともだといえる部分がありますが、翻訳のためには役立つ方法であることもたしかです。

翻訳にあたってなぜ 5 文型が役立つかというと、英語と日本語では構文についての考え方が大きく違うからです。英語では、SV、SVC、SVO、SVOO、SVOC という順序はきわめて重要です。疑問文や倒置構文などで、S、V、O、C の位置が変わることがありますが、それでも文中の位置はきわめて重要です。これに対して日本語には、文中で各部分の位置をかなり自由に変えられるという特徴があります。この点をたとえば、三上章がこう指摘しています。

……「甲が乙に丙を紹介した」の如きは動詞以外の三単位の順序が交換できる点でいわば枝状をなしている。……

甲が\

乙に— 紹介した

丙を/

三上章著『現代語法序説』（くろしお出版）16 ページ

つまり、以下の書き換えが可能なのです。

甲が乙に丙を紹介した。

甲が丙を乙に紹介した。

乙に甲が丙を紹介した。

乙に丙を甲が紹介した。

丙を甲が乙に紹介した。

丙を乙に甲が紹介した。

日本語の場合、助詞があるために、文中の各部分がどのような関係にあるかが明確になっていますが、英語には助詞にあたるものがなく、格変化もないので（ごく一部にはありますが）、S や O、C の関係は位置によって示すしかありません。位置が違えば関係が変わり、意味が変わるのです。日本語と英語のこの違いはきわめて重要です。日本語の感覚で英文を読んだときに盲点になりやすいのです。

ですから、意味がどうもよくつかめないという場合、限界があることは認識しつつ、5 文型の考え方で原文を分析してみるべきです。

パンクチュエーション

この部分ではもうひとつ、第 2 段落第 3 センテンスに 6 つあるセミコロンにも注意すべきです。

英語では 19 世紀初めごろに規範文法が普及しています。規範文法とは、一読しただけではなかなか理解できない文章を正しく読解するための文法ではなく、正しい文章の書き方を示す文法です。恥をかかない文章の書き方というわけです。この結果、たとえば語順やスペルなどがほぼ統一されたほか、コンマ、ピリオド、コロン、セミコロン、ダッシュ、括弧などの符号の使い方も、ほぼ統一されるようになりました（18 世紀までは、これらの点にかなりばらつきがあったのですが）。

ですから、原文にたとえばこのセミコロンが使われていれば、大部分の場合、正しい使い方使われていると考えることができます。文法書などでパンクチュエーションの使い方を調べてください。コロンやセミコロンは小さく目立たないので、気づかなかつたり、無視したりすることがありますが、しっかりと確認しておくべきです。

その他の間違いやすい点

以上にあげたこと以外にも、文法事項で間違いやすい点はいくつかあります。

ひとつは挿入です。第 2 段落第 2 センテンスの *thank God* が典型であり、括弧、ダッシュ、コンマで囲うのが普通です。この *thank God* のように短く、単純な挿入であれば間違えることはまずないでしょうが、ときにははるかに長い挿入もあるし、挿入の

なかにまた挿入がある場合もあります。挿入であることに気づかないと、構文をうまく理解できなくなる場合があります。

否定も意外に間違いやすい点です。文否定か語否定かはそのひとつですが、文否定の場合に、動詞に **not** をつけるのではなく、主語や目的語に **no** をつける場合があります。この形の否定については、英文法書を参照してください。たとえば江川泰一郎著『英文法解説』の § 67 と § 99D が役立ちます。今回の範囲でも第 4 段落の第 1 センテンスと第 2 センテンスでこの方法が使われています。

時制と仮定法も間違いやすい点です。日本語と英語では時の考え方が違い、仮定の表し方が違うからです。そのため、原文にある時制や仮定法を見落としやすいという問題がありますが、もうひとつ、見落とすことなく正確に読んだとして、それをどう日本語であらわすのかも問題です。たとえば、第 4 段落の第 2 センテンスについて質問を受けましたので、その点について考えてみましょう。質問は以下のセンテンスと、前回に比較的優れているとして紹介した訳文に関することです。

We are stricken by no plague of locusts.
われわれはイナゴの大群に襲われたわけではないのだ。

この原文にはたしかに難しい点があります。前述のように、ここでは目的語に **no** をつけた形の否定になっています。また、**stricken** というのはめったに使わない古い表現で、ふつうなら **struck** になります。しかし質問は **are** が分からないというものでした。なぜこの **be** 動詞が分からないかという点、優れているとされた訳文では「襲われた」になっているのに、原文は現在形だからというのです。「被害にあっている」と訳した人もいましたが、原文は現在形であって、現在進行形ではないので、ますます疑問が大きくなるというのです。

これはじつに面白い質問で、翻訳でたえずぶつかる問題をじつにするどく突いた問題だといえます。なぜかという点、「襲われた」という訳は正しいのかという質問ではなく、なぜこの **be** 動詞が現在形なのかという質問だからです。このような質問になった理由は、たとえば次のように訳文を変更すると理解できるはずで

われわれはイナゴの大群に襲われるわけではない

のだ。

これでは日本語になりません。だから、「襲われた」と訳しているのです。こう訳したとき、**be** 動詞が現在形になっていることをとくに意識したかどうかは疑問です。訳す前に原文を読んだときにはたぶん、現在形で書かれていることを確認したでしょうが、実際に訳す段階になると、もうその点は忘れて、理解した意味を表現することだけを考えているはずで

す。だから、**be** 動詞が現在形なのに、「襲われた」でいいのかと質問されると、答えにつまるのではないのでしょうか。

つまり、原文のこの部分が現在形であることをとくに強く意識しなければ、素直に「襲われた」と訳し、それで何の問題もないはずなのに、現在形であることを意識しだすと訳せなくなるのです。そのため、この原文は正しいのかが疑問になります。

翻訳にあたって原文が間違っていることはたしかにあります。原文を書いているのは人間なので、これは当然です。原文が間違っていることはたしかにある。しかし、翻訳で困ったとき、原文が間違っていると考えるのは、最後の最後の手段だと考えておくべきです。ふつうは読み方が間違っているのであって、原文は間違っていないのですから。まして、この原文のように重要な文書の場合には、何重にもチェックされているはずですから、原文の誤りはまずめったにないと考えておくべきです。それに、原文を読んだとき、この部分の現在形に違和感をもつことはないはずで

す。違和感をもつのは、翻訳をするとき、あるいは、他の人の訳文をみて、「襲われた」と訳されているのに気づいたときでしょう。ここで時制が問題になるのは、日本語への翻訳のときだけなのです。

翻訳のときになぜ、この **be** 動詞の時制が問題になるのかを考えていくと、じつに面白いテーマが浮かび上がってきます。本が 1 冊書けるぐらいのテーマです。たとえば、英語の受動態と日本語の受身形の違いという問題もあります。話しはじめればきりがありませんから、いくつかの点だけを指摘しておきます。

真っ先に考えておくべき点は、この「た」が過去を示すのかでしょうか。この点は、以下の 3 つの意味を少し考えればあきらかでしょう。

電車が来る
電車が来た
電車が来ている

「来る」は現在形で「来た」は過去形だという見方がありますが、実際の会話でどう使われるかを考えてみれば、この見方がいかに奇妙かがすぐに分かります。「電車がなかなか来ないね」「もう来るよ」というとき、電車はまだ来ていないし、遠くに見えてもいません。はるか遠くに姿が見えたとき、実際に到着するまでにはまだ数分かかるとしても、「電車が来た」といいます。「来ている」というのはたとえば、改札口からホームに止まっている電車が見えたときでしょう。要するにこの場合、「来る」も「来た」も「来ている」も、過去、現在、未来という時を示す表現として使われているわけではないのです。

「た」が本来、過去を示す助動詞ではないことは、「今度お会いしたときにお話します」という表現をみてもあきらかです。この「た」が過去を示しているはずはありません。

ではなぜ、「襲われた」は過去だと感じるのでしょうか。英語教育で過去は「た」であらわすと教えられてきたからではないでしょうか。おそらく、日本語には本来、過去、現在、未来という時制の感覚はなく、ヨーロッパの言語を学ぶようになって、過去形の訳語として、もともとは確認や完了をあらわす言葉だった「た」を過去の表現に流用するようになったのでしょう。このため、「た」は過去をあらわすとはかぎらず、過去は「た」で表現するとはかぎらないのではないのでしょうか。この点を確認しておくことは、翻訳にあたってきわめて重要だと思います。

じつは、英語の現在時制、過去時制、未来時制も、時を示す表現だとは言い難い面があります。英文法書を読むと、現在時制には現在の事柄をあらわす場合と、過去の事柄をあらわす場合と、未来の事柄をあらわす場合があると書かれています。過去時制にも未来時制にも、現在の事柄をあらわす用法があります。時制とは何なのか、時を示すものなのか、疑問に思えてくるはずですが、おそらくは、英語にも日本語と同じ問題があったのでしょう。英語の世界にも、当初は過去、現在、未来という時間の感覚がなく、近代になって、他の表現を流用して、現在時制、過去時制、未来時制などが作られたのではないかと思います。英語の時制に例外が多いのは、そのため

なのではないでしょうか。

文法書をそろえよう

とはいえ、翻訳を行うには、文法知識が不可欠です。原文を読んですぐに意味が分かるのであれば、文法知識の必要はないのですが、読んですぐに意味が分かるのであれば、じつのところ、翻訳の必要はないのです。原文を読んでも簡単には意味が分からないから翻訳が必要になります。ですから、翻訳を行うのであれば、文法が不可欠であり、文法書を何冊かそろえておくことが必要になります。

いくつかの文法書を紹介しておきましょう。まず以上で参考にした文献をあげ、つぎに皆さんがそろえておくべき文法書の例をあげていきます。

参考資料

柴田耕太郎著「翻訳講座 文法編」(未刊行)
C.T. Onions, *An Advanced English Syntax*, 1904(アニア
ンズ著安藤貞雄訳『高等英文法』)

各人でそろえておくべき英文法書の例

江川泰一郎著『英文法解説』(金子書房)
安藤貞雄著『現代英文法講義』(開拓社)
安井稔著『英文法総覧』(開拓社)
堀口俊一・吉田劭著『英語表現文法』(聖文社)
レナード・デクラーク著安井稔『現代英文法総論』(開拓社)
村上陽介著『英語正読マニュアル』(研究社出版)
細江逸記著『英文法汎論』(泰文堂)

最後に日本語文法の本をひとつだけ紹介します。

三上章著『象は鼻が長い』(くろしお出版)

これは参照用においておく本ではなく、一度は読んでおくべき本です。日本語には主語はないと主張した本であり、翻訳を柔軟に行えるようにするために、必読の本だと思います。